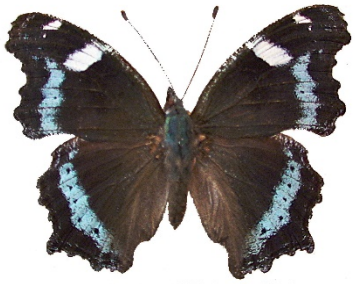
ルリタテハは通常市街地で見ることが少ないチョウだが、高砂市西畑や松波町では比較的よく見かける。それは幼虫がユリ科植物の葉っぱを食べるからで人家庭先に植栽されたホトトギスが発生源となっている。加古川市志方町のような里山が残る地域ではサルトリイバラ（別名サンキライ）やヤマユリなどから発生している。筆者の郷里である高知市ではサンキライの大きな葉っぱで包み込んだモチを芝モチといって蒸して食べる習慣があり、子供の頃にはこの葉っぱをとりに山に入り、するどいトゲに困惑したものだ。

さてルリタテハだが、チョウになってからは樹液や果物の果汁、腐敗物などに好んで集まり、花を訪れるのは越冬後の観察例が多くなる。西畑高砂公園のテニスコートなどでは毎年見かけるのだが、樹液などのない市街地では一体何をエサとしているのかが心配で、実際、よくわかっていない。ルリタテハはとても敏活に飛ぶため、チョウに関心のないひとには何か黒いチョウが飛んでいったとしかわからない。でも、ルリタテハは路面や倒木などに羽を広げてとまることが好きなチョウで、その光景に出くわした人には濃紺の地色にみごとに美しく映えるルリ色の帯状模様が目に飛び込んでくる。「えっ、こんなきれいなチョウが身近にいたのか」という瞬間である（好みによってはアカタテハ、あるいはヒオドシチョウの方がきれいだという人がいるかもしれないが）。写真は加古川市志方町の里山、春の陽光が射しこむ林床で日光浴を楽しんでいるところ。人の気配にはとても鋭敏ですぐに飛び逃げるが、スイースイーヒラリと同じ場所にまた舞い戻ってくる習性がある。これは縄張り（テリトリー）を張るというタテハチョウ類に多くみられる面白い習性で、自分よりはるかに身体の大きいヒヨドリを領域侵犯まかりならぬと追いかけるのを目にしたこともあり、木の葉や他のチョウ、トンボなど“動く物体”を激しく追飛する占有行動である。

アカタテハと違ってルリタテハには季節変異があり、秋に発生する個体がことさら美麗となる。ルリ色の帯模様がえもいわれぬ深みのある色調となり、翅形も秋型の方がより芸術性を増すように思う。1962 年の写真は実に 60 年も前の筆者の所蔵標本だが、きちんと管理をすれば美しい色彩がまだ楽しめる。1981 年の秋型標本は西畑在住時、庭のホトトギスで自然発生した個体の記録標本である。タテハチョウの仲間は羽の表裏が著しく異なっているものが多く、総じて美しい

June 29, 1962 高知市五台山 夏型


Oct.10,1981 高砂市西畑 秋型

裏面

翅表にくらべて裏は地味な褐色や黒っぽい樹肌に似た模様になっている。これは樹木や枯葉の上などに羽を閉じて静止した際みごとな保護色となって、その身を外敵から守ってくれる自然の妙である。ところで、このチョウの蛹には金色に輝く紋が見られ、ツマグロヒョウモンの蛹にもみごとな金色紋があるが、異なる食草で育つこれらチョウの蛹に共通して見られるこの金色はいっ

Copyright© 1998- Soft House JUMP. All rights reserved.

たいどういう植物成分から生まれるのだろうか。沖縄や八重山諸島には蛹全体が金色に光り輝くオオゴマダラやヤエヤマイチモンジというチョウもいて、自然界の不思議は尽きることがない。

ルリタテハも北海道から八重山諸島まで広く分布し、南西諸島では 2002 年の与那国島産標本に示すように、ルリ色帯がより内側に偏よる亜種（*ishima*）として区別されている。なお、この標本は前翅の白紋が青色となった、蝶仲間が“ルリイチモンジ”と呼んで珍重する台湾産に似た個体である。

Sep. 14, 2002 与那国島

ルリタテハは崖の縁や岩の下面、浅い土の中などでの越冬観察例が知られているが、越冬後の羽はほとんど傷んでいない。同じタテハチョウ科のヒオドシチョウが、羽化したばかりの新鮮個体ではすばらしく美麗なのに、越冬後には特に♂において見るも無残なボロボロの羽となって飛び出してくるのとは好対照である。

Apr. 14, 2016 ルリタテハが産卵

4 月 9 日に連れ帰ったお腹がでっぷりと大きな♀のルリタテハをサルトリイバラ（サンキライ）の新葉と一緒にタッパウエア内に閉じ込め、スポーツドリンクを水で 2 倍に薄めた液を与えて様子を見ていたが、5 日を経過した本日、実に 60 個という大量の産卵をしてくれている。角度を変えると三段重ねという、サカハチチョウの産卵習性を思わせる離れ業がくっきりと観察

できる。野外では、このような集中産卵はありえないことだが、これらが有精卵かどうかも実は今の段階で確信は持てない。この母蝶は、車のボンネットのブルーに執着する行動を観察できたが、一気に気温が上がった野外へと放すと、元気よく飛び立っていった。

Apr. 20, 2016 ルリタテハが孵化

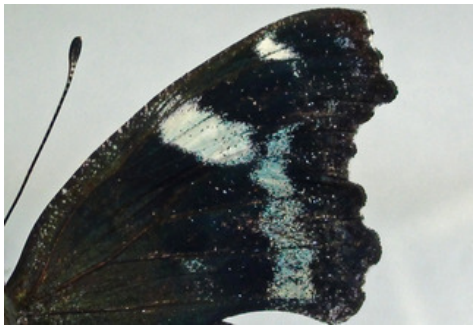
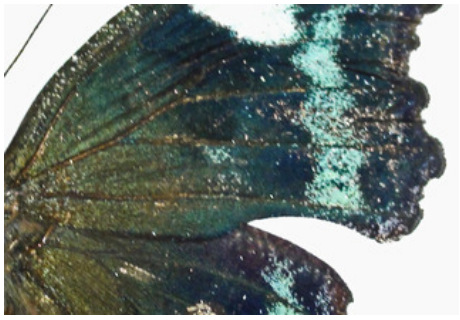
越冬ルリタテハの♀はうれしいことに交尾済みであった。産卵から一週間となる昨日（4 月 19 日）、卵が鉛色に変化して孵化の兆候を示していたが、本日の 16 時過ぎにいっせいに孵化が始まっている。合計 60 個の産卵数で、そのうちの 20 個を友人に提供し、なお残る 40 個という飼育はルリタテハでは初めての多さだ。機会あるごとにサルトリイバラの新葉の調達準備をしてきているが、タッ

Copyright© 1998- Soft House JUMP. All rights reserved.

パウエアの容器内へと移動して動く幼虫をそっと新葉へと移す作業には気を遣う。例えば日本蝶類生態図鑑（II）には孵化した幼虫は卵殻のほとんどを食べるという記載がみられるが、必ずしもすべての個体でそうとは限らないようだ。

July 28, 2016　ルリタテハの珍しい変異体

5 月の飼育羽化ルリタテハのなかに前翅に小さい青紋が発現した個体を確認し、乾燥標本として本日展翅板から外した。母チョウは Apr. 9 のギフチョウ観察会の日に車の周りで愛嬌を振

りまいてくれた越冬個体で、4 月 14 日から約 60 卵を産み、20 卵を友人にわけて残りの 40 卵から 35 個体が成虫となり、多くは野外へと飛ばしたのだが、その中でこの「スバル型」と呼ばれる変異はただの 1 頭だけで、筆者にとっては初めての体験（羽化は May 23, 2016）。 Web 検索で本変異個体の報告例をみることができるが、発現頻度は高くないと思われ、ズームアップ撮影記録も示しておく。

Apr. 2, 2021

コナラを主とする雑木林内を複数のルリタテハが楽しげに飛び交い、すぐそばで何度も美しい翅表を広げて見せてくれる。最初の開翅個体は左前翅がかなり傷んでいるが、ルリ帯の美しさは見事。日当たりのいい石の上で開翅動作を繰り返す個体は、いかにも「しっかり撮影記録をとって」といわんばかりの愛嬌ものだ。ギフチョウが立ち寄るかもしれないイカリソウまわりから目

をそらしたくはないけれどもせっかくの大サービスに応えて撮影記録もとっておいたのだが、昨日、A さんから「ここにはスバル型もいるよ」と聞いていた通り、枯れたコナラの樹肌になんどもやってきて翅を広げてくれる個体も撮影しておいたところ、この個体がスバル型であったことがあとでわかる。

Copyright© 1998- Soft House JUMP. All rights reserved.